

ぺしやんこの紙風船の時間かな

藤田湘子

私の子供時代、富山の菓売なる行商人がやって来た。一年か二年に一度、何段もの荷物を担ぎ、家々を回りながら、置菓の交換と減った菓の集金が仕事であった。そして、女の子のいる家では、おまけとして「紙風船」を渡してくれるのだった。男の子が何をもらったか忘れてしまったが、色模様の紙風船が少し羨ましかった。「ぺしやんこの紙風船」に横からふーつと空気を入れると、丸々と膨れ、菓売りは、まるで手品のように何度も弾いて見せてくれた。

ふくらんだ紙風船には、夢や希望や儂い幸せの時間があつたように思える。藤田湘子七十五歳、「ぺしやんこの紙風船」に何を視たのだろうか。

2003年（115作）第十一句集『てんてん』 鑑賞・轍郁摩